

資料

A 大学看護学生のコミュニケーションおよび行動の傾向

佐藤美幸<sup>1)</sup> 柿並洋子<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 宇部フロンティア大学人間健康学部

キーワード；コミュニケーション，行動，看護学生，看護学実習

I はじめに

コミュニケーション技術は、円滑な対人関係を築く上で重要な役目を果たす。特に看護職は対人援助の仕事であり、対人関係を形成する技術は最も重要な看護技術であるといえる。

現代の青年はコミュニケーションスキルが低いといわれ、栗田<sup>ら</sup>は、大学生は“コミュニケーションが上手な人”は“話すのが上手な人”であり、聞き上手や雰囲気作りを上手にこなすことも重要であると考えているが、相手の顔色を見ながら聞く傾向やアサーティブな自己表現は困難であると指摘している。平尾<sup>ら</sup>は、学生への調査から、観る力・聴く力はあるが、質問する力、伝える力が弱いという。また、中村<sup>ら</sup>は縦断調査を行い、大学生の性格傾向は変化しており、感情的な繊細さ、行動面における積極性のなさ、対人関係における消極性が増しているという。文部科学省も、「近年の学生は、人との関わりや実体験に乏しく、『人とうまくつきあえない』、『人の噂が気になる』、『無気力』など、様々な心の問題を抱えている学生が増えている」と指摘する<sup>4)</sup>。

厚生労働省は、看護基礎教育の充実に関する検討会<sup>5)</sup>の中で、「近年の若者世代同様、看護学生の基本的な生活能力や常識、学力が変化してきていると同時に、コミュニケーション能力が不足している傾向がある」と指摘している。看護教育の中でも基礎分野において、コミュニケーション能力を高めることを含め、基礎看護学でコミュニケーション技術を看護師に欠かせない能力として教育内容に含めている。大学教育における4年間の中で、いかにコミュニケーション能力を身につけさせるかが課題であり、本学においても、1年次の基礎ゼミナールにおけるグループワークやコミュニケーション論など、コミュニケーションを高めるための教育に取り組んでいる。

実際の看護学実習の現場において、最近の学生との

コミュニケーションについての悩みや相談をしばしば耳にする。実習指導者の多くは10年以上の看護経験を持つ者であり、教員については、40歳代以上の者も多く、学生とは親子以上の年齢差がある場合が多い。学生とのジェネレーションギャップは避けられないことである。

看護学科においては、実習を通して学生と関係性を保ちながら指導していく必要があり、学生の行動特性やコミュニケーション傾向を知ることは円滑な実習指導のためにも重要である。本稿においては、コミュニケーションを対人に対する情報（知覚・感情・思考）を伝達する手段であり、言語的・非言語的な方法を含むものとする。

よって、本調査の目的は、学生の基本的なコミュニケーションおよび日常の行動と実習に対する態度についての傾向を探ることで今後の学生指導のあり方を考える資料にすることとした。

II 方法

1. 調査対象

A 大学看護学科に在籍する1年生から4年生の学生のうち285名であった。調査は2012年12月に実施した。

2. 調査方法

独自に作成した質問紙を用いた。調査票は、属性として、性別、年代およびコミュニケーション手段として使用している通信手段、利用しているSNS（ソーシャルネットワークングサービス）と時間の回答を求めた。また日頃のコミュニケーションや行動の傾向、実習におけるコミュニケーションや行動の傾向について回答を求めた。なお、選択肢は学生が回答しやすいよう、2件法とした。

調査は、学年毎に講義の終了時に行った。研究の趣

旨と倫理的配慮を説明し、時間が許す限りその場で記入してもらい、講義室に設置した回収BOXに投入してもらった。回収BOXは当日すべての講義終了後まで設置し、時間のあるときに記入することも可能とした。

### 3. 倫理的配慮

文書および口頭で以下のことについて説明した。

調査は、無記名であり、統計的に処理するため個人は特定できない。結果は、学内外で公表し、研究終了

後にデータは適切に処理する。調査への参加は自由であり、不参加や内容によって成績や処遇等に不利益を被ることはない。文書および説明を聞いた上で、協力的に同意する場合に記入し、回収BOXに投入してもらうこととし、提出を持って同意と見なした。

### 4. 分析

得られたデータは記述統計量を算出し、学年間で比較した。

## III 結果

表1 学生のコミュニケーションおよび行動の傾向

	(%)				
	全体	1年	2年	3年	4年
対象者数(人)	277	89	98	68	22
コミュニケーションを取るのが苦手だ	41.8	51.7	34.7	44.1	27.3
同年代の同姓の友人となら気軽に話せる	82.9	78.7	91.8	76.5	77.3
同年代の異性の友人とも気軽に話せる	58.9	52.8	62.2	58.8	68.2
異世代の人と気軽に話せる	53.8	53.9	55.1	48.5	59.1
敬語を使うのが苦痛だ	18.2	16.9	18.4	22.1	18.2
リーダーになるのは嫌だ	69.8	69.7	69.4	70.6	72.7
できれば人の前には出たくない	66.2	67.4	64.3	66.2	72.7
人から頼まれたら嫌といえない	68.0	64.0	71.4	70.6	59.1
他人の評価が気になる	70.5	70.8	64.3	77.9	77.3
自分は気が利かぬと思う	59.3	56.2	57.1	63.2	63.6
仕事や役割は決められたこと以外はしたくない	36.0	33.7	38.8	36.8	31.8
自分のためになること以外はしたくない	24.4	16.9	27.6	36.8	4.5
注意されると腹が立つ	35.6	34.8	32.7	42.6	31.8
注意されると嫌な顔をしていると思う	42.7	37.1	45.4	45.6	50.0
失敗をしたら素直に反省して謝ることができる	82.5	83.1	81.4	83.8	81.8
失敗すると次はがんばろうと思える	86.5	88.8	85.7	82.4	90.9
できないことや難しい問題にあたるとすぐにあきらめる	41.5	33.7	48.0	44.1	36.4
自分はほめられて伸びるタイプだ	73.5	69.7	74.5	76.5	72.7
自分の思いとは違っていても周りに合わせる	73.1	70.8	70.4	77.9	81.8
苦手なことを克服するための努力をしている	49.5	49.4	46.9	45.6	68.2
嫌なことからは逃げるようにしている	45.1	36.0	51.0	47.1	54.5
文章を書くのが嫌いだ	64.4	60.7	62.2	70.6	72.7
勉強するのが嫌いだ	77.1	78.7	68.4	83.8	86.4
本を読むのが嫌いだ	41.5	37.1	40.8	48.5	40.9

表2 看護学実習における学生の傾向 (%)

	全体	1年	2年	3年	4年
対象者数(人)	277	89	98	68	22
患者とのコミュニケーションができなかった	32.4	30.3	53.1	10.6	13.6
実習指導者とコミュニケーションが取れなかった	22.5	23.6	24.5	19.7	18.2
実習指導教員とコミュニケーションが取れなかった	13.1	11.2	19.4	7.6	9.1
言葉遣いが悪かった	7.3	5.6	8.2	6.1	13.6
敬語が使えなかった	8.4	11.2	7.1	6.1	9.1
指導者や教員に聞いてよいのかがわからない	33.1	30.3	36.7	33.3	27.3
患者の気持ちがわからない	44.0	44.9	60.2	24.2	27.3
指導に対して前向きに受け止められた	91.3	95.5	91.8	90.9	72.7
指導されてムカツいた	12.4	10.1	7.1	20.0	22.7
実習中の態度が悪かったと思う	7.3	5.6	10.2	3.0	13.6
実習のために看護技術の自己学習を十分にした	51.6	52.8	45.9	53.0	68.2
十分な事前学習をして実習に臨んだ	40.7	47.2	28.6	43.9	59.1
実習のための勉強をどのようにしたらいいのかわからない	65.8	73.0	69.4	62.1	31.8
実習記録の書き方がわからない	59.6	61.8	73.5	47.0	27.3
文章の書き方がわからない	60.4	57.3	67.3	62.1	36.4
何がわからないのかわからない	58.2	56.2	62.2	56.1	54.5
カンファレンスで意見を述べることができなかった	28.7	27.0	30.6	28.8	27.3
看護技術に自信がない	81.1	80.9	88.8	69.7	81.8
自分の知識は十分だ	8.0	6.7	9.2	7.6	9.1
実習は好きだ	43.6	47.2	38.8	42.4	54.5
実習に行ってますます看護師になりたくなった	64.7	69.7	62.2	56.1	81.8

学生のコミュニケーション及び行動の傾向を表1に、看護学実習における学生の傾向を表2に示す。

対象とした285名のうち、275名から回答を得た(回収率96.5%)。内訳は1年生89名、2年生98名、3年生66名、4年生22名であった。男性は、58人、女性は217人であった。通信機器の保有率は、携帯電話32.0%、スマートフォン76.7%、タブレット端末2.2%、パソコン55.3%、携帯型ゲーム機12.0%であった。SNS利用は、Facebook57.8%、ツイッター39.3%、ブログ29.5%であった。こういった携帯電話等の利用時間は1日平均202.2±222.5(平均±SD;以後同じ)分、直接電話で会話をする時間54.1±106.1分、メールを利用する時間61.0±121.9分、SNS利用時間65.5±90.7分であった。

日常のコミュニケーションと行動の傾向について尋ねたところ、全体の41.8%が「コミュニケーションを取るのが苦手」と答えており、学年が上がると苦手と答えた者は減少している。また、同世代の同性の友人とは比較的気軽に話ができるが、異性や異世代の人

とは約半数が気軽に話せないと答えた。行動の傾向では、「他人の評価が気になる」と答えた者は70.5%であり、3、4年生では、約77%を占めた。「注意されると腹が立つ」という学生は、全体の35.6%、「注意されたら嫌な顔をしていると思う」と答えた者は、42.7%であった。一方で「自分の思いとは違っていても周りに合わせる」のは73.1%、「頼まれたら嫌といえない」学生は68%であるが、「リーダーになるのは嫌だ」69.8%、「できれば人の前には出たくない」66.2%とリーダーシップは取りたくない傾向が見られた。「嫌なことからは逃げるようにしている」学生は全体の45.1%で、4年生では54.5%であった。

実習におけるコミュニケーションや行動は、「患者とのコミュニケーションができなかった」と答えたのは全体の32.4%で、これは学年が上がるとコミュニケーションが取れたとの回答が増えていた。また「実習指導者とのコミュニケーションが取れなかった」(22.5%)、「実習指導教員とコミュニケーションが取れなかった」(13.1%)との回答があった。「言葉

遣いが悪い」と答えたのは全体の7.3%、「敬語が使えなかった」のは8.4%であった。また、「患者の気持ちかわからない」と答えたのは、1年生で44.9%、2年生で60.2%であり、3年生は24.2%、4年生は27.3%であった。

指導に対して、「ムカついた」と答えたのは全体の12.4%であり、態度が悪かったと自覚しているのは、7.3%であった。

実習に対する姿勢として、自己学習を十分にしているのは40.7%と半数以下であり、看護技術の自己学習は51.6%が十分にしていると答えた。一方で「技術に自信がない」のは81.1%、「知識が十分でない」のは92%であり、「何がわからないかわからない」と答えた者は58.2%であった。

「実習が好き」と答えた者は、全体の43.6%、「実習に行ってますます看護師になりたくなった」と答えた者は、64.7%であった。

#### IV 考察

本研究で対象とした学生は、1993年（平成5年）前後の生まれである。1993年の出来事として、皇太子様のご成婚、北海道南西沖地震、1993年米騒動の年である。サッカーJリーグが開幕し、ジュリアナブームと、景気は後退期にあったが、まだ日本全体に活気が残っていた時代であろう。この頃の通信手段は、携帯電話は1.7%<sup>6)</sup>にとどまり、パソコン普及率も11.9%<sup>7)</sup>とIT化にはほど遠い時代であり、同年通信のデジタルサービス導入後一気に携帯電話が普及した。現在では、携帯電話の普及率は94.5%、パソコンは平成21年の87.2%をピークにやや下がってきたものの、77.4%が所有している<sup>8)</sup>。

同時に近年、スマートフォンの普及とともに注目されるのがSNSである。SNSを悪用した犯罪やそれをめぐるいじめなど社会問題にも発展しているが、学生世代の中では、普通に使われており、生活の中で欠かせないものという学生も多い。

教育的背景を見てみると、1992年に「新しい学力観」が提議され、毎月第2土曜日が休日となる学校週5日制が開始された。1996年度には、21世紀における我が国の教育のあり方として、「生きる力」を育むことが重要であるとされ、ゆとり教育の新たな目標としてあげられた。2002年度にはこれらの理念をもとに総合学習の時間が加わり、完全学校週5日制が実施された。こうした教育改革の中で、現在の学生はまさに“ゆとり世代”であり、ゆとり教育の中で育まれてきた。

さて、こうした背景を持つ学生が大半である現状の中で、一つのコミュニケーション手段としてデジタル

機器やSNSなどが存在している。一日の時間のうち3時間半を携帯電話等を利用する時間となれば、放課後の自己学習時間に影響がないとはいいたい。実習においても自己学習が十分できている学生は40.7%であり、何がわからないかわからないほど自己学習が不十分であることがうかがえる。また、勉強すること、文章を書くことが嫌いであり、勉強の仕方がわからない学生も多い。これらの学生に対しては、1年生における基礎ゼミナールでの学習や日々の振り返りを習慣化し、活用していくことで自らの気づきになればと考える。また、チューター制度の活用や講義の中できめ細かに指導していかざるを得ないのではないだろうか。

ウィーデンバックら<sup>9)</sup>は、効果的な看護のためには、コミュニケーションの技能を身につけ、患者との信頼関係を確立していくことが重要だと述べている。また、話すことと書くことはコミュニケーションの分野における特別な対人関係の技能となり、これらにより、相手の理解を増すことにつながると言及している。看護を行う上で患者あるいはスタッフ間でのコミュニケーションは不可欠であり、いかに良好なコミュニケーションを行うかによって、得られる情報もその後展開される看護も変わってくる。

学生は、実習の中で对患者あるいは対指導者とのコミュニケーション技術を身につけていく。その中でせめて対教員とのコミュニケーションが円滑に行えるよう、教員としても工夫が必要ではないだろうか。若い学生にとって「患者の気持ちがわかる」ことは非常に難しいことであろう。学生には患者の気持ちを理解する姿勢を身につけてほしいと考える。栗田ら<sup>10)</sup>は、学生は話すことが上手な人がコミュニケーションが上手だと考えているという研究結果を示している。その上で聴くことの重要性を説いていく必要性を指摘しているが、患者とのコミュニケーションをどう捉えているかも指導の視点となるだろう。廣瀬ら<sup>10)</sup>は、高いコミュニケーション能力は実習等での成功体験を増やし、結果として看護職者としての同一性を高めると述べている。早期から実習を行い、患者やスタッフ等多くの人に接することで、コミュニケーション能力を高める指導をすることができ、その後のモチベーションにもつながると考えられる。また、酒井<sup>11)</sup>は、対人関係を苦手とする学生には、学生が自分の対人関係の特性を自覚することを促し、自己受容を進められる関わりをする必要性を述べている。本調査においては、4年生はほぼすべての講義、実習を終えており、1年生は、最初の基礎看護学実習でのみ実習の経験がある状態での調査を行った。その結果学年が進行するにつれて「コミュニケーションが取れた」との回答が増加し、一方

で「患者の気持ちがわからない」という回答が減少しており、実習を乗り越える度に成長している様子がうかがえる。

学生は、「他人の評価を常に気にして」おり、「自分の思いとは違っていても周りに合わせ」、「できれば前に出て目立つこと」は回避し、「嫌なことから逃げる」傾向があるのが今時の学生なのかもしれない。こうした学生をいかに上手くフォローし、指導していくのが教員の力量であろう。

今回の調査から、「実習に行ってもますます看護師になりたくなかった」という学生が過半数を超えており、実習を通じてよいモデルとなる看護師に巡り会えたこと、いい学びを体験できたことの結果だと考える。今後さらにより実習指導体制を整えて行くことが教員としての役割であると考えます。

#### 謝辞

アンケートにご協力いただいた学生の皆様に深謝いたします。

#### 引用文献

- 1) 栗田智未, 内野悌司, 小島奈々恵ほか: 大学生のコミュニケーション行動と意識の調査—コミュニケーションの自己評価を中心に—, 総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集, 28, 43-49, 2012.
- 2) 平尾元彦, 重松正徳: 大学生のコミュニケーション能

- 力とキャリア意識, 大学教育, 4, 111-121, 2007.
- 3) 中村晃: 大学生の性格における年代的变化, 千葉商大紀要 41(3), 1-19, 2003.
- 4) 文部科学省, 大学における学生生活の充実方策について—学生の立場に立った大学づくりを目指して—, 2006.
- 5) 厚生労働省: 看護基礎教育の充実に関する検討会, 2007.  
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> 2007
- 6) 総務省: 情報通信統計データベース,  
<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/wp-pl199/hokusyo-99-index.html>.
- 7) 経済企画庁: 平成11年度国民生活白書.  
<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/wp-pl/wp-pl199/hakusho-99-index.html>
- 8) 総務省: 平成24年情報通信白書.
- 9) アーネステイン ウィーデンバック, キャロライン E. フォールズ著, 池田明子訳: コミュニケーション効果的な看護を展開する鍵, 日本看護協会出版会, 1979, 東京.
- 10) 廣瀬春次, 太田友子, 井上真奈美ほか: 看護学生のコミュニケーション行動に関する研究, 山口県立大学学術情報, 4, 47-53, 2011.
- 11) 酒井美子: コミュニケーションが苦手な看護学生の対人関係の特性から教育的支援を考える, 群馬県立県民健康科学大学紀要, 5, 103-114, 2010.